
花を愛でるということ

蜷岸 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花を愛でるということ

【Zコード】

Z0874U

【作者名】

蜷岸 透

【あらすじ】

久瀬洋介が青洲寺姫乃と過ごす、ひと夏の物語

一輪の花に、俺は救われたんだ。

昔の話にはなるのだが、酷く悲しいことがあった。はつきりとは覚えておらず、ほとんど忘れてしまっているけれど、決していい思い出にはならないような、そんな悲しい出来事。ただ漠然と……そういう、漠然と思い出していた。あの、なんともいえない悲しさを。

それを抱えながら、淡々と生き続ける毎日。

空虚だった、俺の日常。

それが全部吹き飛ぶよつな出来事が、起こったんだ。

「ねえ君。世界に楽しいことって、いくつあるか知ってるかな？」

小学校の入学式。春を迎える、ドキドキした気持ちを押し込めるのに必死だった。

緊張もある。不安もある。……勿論、悲しみもある。

しかし、久瀬洋介くわせひやうすけという人間にとつては、それ以上に胸を高鳴らせるモノがあった。

「世界にはね。君の知らないこと、勘違いしていること、それに、これから好きになることが、沢山あるのだから」

その子はアザレアだった。

とても大きくて、とても健気で……とても美しい、春に咲いた一輪のアザレアだった。

俺がたじろぐと、とつとつ、と駆け寄つてくる。目と鼻の先くらいの距離で咲いた笑顔。心臓はバカみたいに高鳴つて、肋骨が折れてしまふんじゃないか、なんてちょっと心配になつた。

「だからほら、手を取るんだ。君もきっと、楽しいことが沢山見つかるんだから」

伸ばされた手を、たどたどしく掴む。柔らかいけれどしっかりと、意思のこもった手。俺は惹かれていた。

陽光が眩しかった。目がしばらく言つことをきかなかつたけれど、彼女の顔だけはちゃんと見たい。そう思った。だから何度も瞬きをしてみる。

「だからさ、一緒に」

目が光に慣れてきた頃、俺の手を引いて走り出した少女。言葉はせき止められ、ただされるがままでしかなかつた。それがどうしようもなく、もどかしくて。

そんな俺に、彼女は笑いかけて言つたのだ。

不審者を、探そうと。

花を愛でるところ

五月十一日

「カムバツク不審者！」

青洲寺姫乃は天に手を伸ばし、開いた手の平をギュッと握り締める。そしてそれを胸元まで持つていってから、思い切り後ろのホワイトボードを叩いた。

「今からみんなで不審者を探しに行くわよ！ 不審者！」

まるで保育園児が人気の遊具を独占しに行くようなテンションで言つ彼女を、きっと誰であつても止めることはできないだろう。なんせ青洲寺姫乃である。

見たら絶対に忘れられない、中身も外見もインパクトの強すぎる女だ。

「ちょっと洋介？ アタシが行くつて言つてんだから、ひとつと早くさつさとすぐに、ちょっとばやで準備しなさいよねー。」

空調の効かない室内で暑くてたまらないつていうのに、ギャーギャー騒ぎまわる姫乃。俺はといえばパイプ椅子に体を預け、街で貰った団扇を片手に呆けているのであつた。

意外とこういう時間は贅沢なんだよなあ。そう思いつつ、手を動かす。

「ちょっと聞きなさいよ！ もうみんな、先に行っちゃつたわよ？」

「へえ、意外とアクティブなんだな。その、みんなとやらは」

ちなみにうちの部活には俺と姫乃しかいないのだが、みんなってのは誰のことなんだろうな。もし俺の知らない間に入つた部員がいて、さらにそいつが有能なのだとしたら、俺は喜んで退部届けを叩きつけてやれるんだが。

パタパタと扇ぎながら姫乃を見る。身長はジエットコースターにギリギリで乗れるくらいな程ちっちゃいお子さまの癖に、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。茶色がかつたビー玉みたいな瞳をぱちぱちさせて考える姿はそこそこ可愛い……気がする。

髪は長い。腰の辺りまで伸びている。前髪を左分けにすることが多く、ピン止めには、某探偵物アニメで変声機の役割を果たしていった赤い蝶ネクタイ型ピン止めを使つている。

ようはお子さまなのだ、コイツは。

真面目にしていれば男女問わずに入氣者なのだが、如何せん行動が災いして一部の層にのみ人気が高いのである。

その層については、まあ、語るまでも無いな。

そんな姫乃はギクッと一瞬したかと思えば、冷や汗混じりに弁解し始めた。

「そつ、そつよ？ めっちゃアクティブなんだからー、みんなつて

ば『今日は何人見つけようかな』とか『昨日飲んでたらたまたま不審者に出くわしちゃつてやー、もうなんか一緒にハシゴしちゃつたよー』とか言いながら嬉々として出かけて行つたんだから…』

「自分たちが不審者ってことには気付かないのな！」

特に一緒に飲んでるやつ。お前それ、たまたま道で意氣投合しただけの酔っ払いなんかだからな。

ちなみに俺たちは高校生である。このバリバリの進学校で、一回は留年するような猛者でもない限りは、酒は飲めないハズなのだが。俺は扇ぐ手を休め、ふうっと息を吐く。全然涼しくならないから

か、姫乃も少々暴走気味だ。

「はあ……そんなことばっかりお前が言つてるから、なかなかウチの部は評価されないんだろ？」

溜息みずはいだつて出るつてもんだ。

瑞原学園高等部。みずはいがくえんこうとうぶ県内から選りすぐりの学生が集められ、研鑽を積むための学園。進学校の中でも秀でた人間の集まりであり、部活動でも高成績を残す文武両道の学校だ。

それほど素晴らしいと語られている進学校の中で、艶みたいな扱いを受けているのが我ら『推理行動愛好会』である。

まあ理由と言つても、色々な問題があるんだ。

しいて言えば、非常に扱い辛い部活であるからだろ。

一つ。校内学力ランク一位の青洲寺姫乃が発足してしまったことが原因だ。あの高学歴揃いの教師たちが言い負かされ、それに感嘆した校長が顧問になつてしまつ、ということがあつてから、生徒会並みの権力を保持する団体にまで成りあがつてしまつたのである。

次に、活動内容が不可解なことが問題だ。

活動内容は一言『不審者を探す』である。

……誰かが気をきかせて、姫乃のことを一一九に通報したとしても、俺は横で見送るしかできないんだろうな。

「いるもんね！ 絶対不審者いるもんね！」

床に寝つ転がつてジタバタと暴れまわつてゐる、可哀想な不審者

(御年一八歳)を尻目に、俺は　何度も忘れてしまったが
肺の底から溜息をついた。

全く。いつまでも変わらない会長様だ。

「はいはいわかったって。それで?　今日はどうするんだ」「……校舎裏から住宅街にかけては近隣の警察官が巡回してるから、地元民しか使わないような路地を探すわ」

口を尖らせ涙目になつた姫乃をゆっくりと起き上がりせる。「いつも指示する時だけはカッコいいんだが、いまいちスカートを払う仕草なんかで台無しになつてている節はある。

「アイアイマム。先導、よろしくお願ひします」

とりあえずテキトーにそれっぽく、恭しく頭を下げておく。

「うむ!　なんかよくわかんないけどわかつた!」

「ひちこい、みたいなことをペラペラ言いながら出て行つた彼女の背を見やる。初夏を彷彿とさせる、氣だるい暑さ。その中を構わず駆ける姫乃是、なんだかとても輝いて見えた。

「ほりほり、おいで!　洋介つてば早く!」

頭を一、三回搔く。覚悟を決めると、俺は蒸し風呂みたいな屋外に飛び出した。

七月三十日

世間一般の夏休みとは何か。それを問う前に言つておきたい。

青洲寺姫乃是、不審者である。この事実を改めて提示する理由は、まず前文の問い合わせてからにしよう。

夏休みとは、長期休業における、自分の自由な時間を謳歌する期間である。レジャー然り、帰省然り、バイト然り、恋愛然り……。言わば自分を磨くために設けられたと言つても過言ではない。

しかし、我が校の夏休みは一昨日から始まったのだが、俺は全く始まつたという気がしないのだ。

「あーちーいー……」

「ああ……」

俺たちは部室で萎れていただけだつたからだ。

部室は校舎横のプレハブ小屋。いくら校長が顧問だろうが、学校一の才女だろうが、クーラーを付ける程の予算を工面するのは無理だつたようだ。

そもそも、元は体育倉庫かなんかだつたと思つんだよな、口々。いわゆる部室棟というものは存在する。三階建てで、そこそこ大きい。三階と一階は文化系、一階は運動部の更衣室だ。プールの方にはシャワー室も完備してたりするので、この学校は部活動に対して比較的協力的であることが、おわかりいただけるだろうか。

……我が部を除いて、の話だが。

「絶対みんなアタシのこと嫌いだよ……なんでアタシらだけこんな扱いなんだよー」

パイプ椅子に仰け反るようすに座りながら、ブラウスの胸元を開ける姫乃。……つておい。

「お前な……俺がいるんだぞ。慎めよ」

「いいじょんかー。どうせ透けてるんだからさー」

山吹色と黒のチョックのスカートから伸びた足を組み替えながら、ルーズリーフの束で扇いでいるが、やはり熱風では心地よくないようだ。半目で眉をひそめながら外を眺めるコイツを見ていれば、それがよくわかる。

「こりや熱中症にでもなつたら、お前のお母さんにお世話をなるかもな」

姫乃の母親は医学会では有名な人らしい。もう血統からして違うわけだ、天才様は。

「うーん。あの人の話はあんまりしないで欲しいかも
あんまり好きな話でもないらしく、俺はさつさと今日の目的について聞くことにした。

「そういうば、なんで部室に集まる、なんて言つたんだ？ 別に図書館とか喫茶店みたいな場所もあるじゃねえか」

部屋に温度計はない。それは現実を直視することが、必ずしも最善ではないからだ。

例えば、実は室温が四十度を超えていたりとか、入り口の鉄扉に生卵を投げてぶつけたら、しつかり黄身まで焼けてから地面に落ちるとかな。

そのくらい暑い。換気の出来る口はまだマシなんだが、本当にマシな程度であるからやっぱり暑い。

非常に熱中症の危険性が高いのだが、このおバカさんはわざわざ窓も開けずに凌いでいる。

「はれ？ 言はなはつはつへ？」

カラになつたペットボトルの口につけた氷を、舌ですくいながら喋る姫乃。こら、下品だろうが。

俺がバッグから新しいストレートティーを差し出すと、姫乃は嬉しそうに口に含んだ。そうそう。ゆっくり飲まないとな。

……だんだん子供をあやすよつな扱いになってきた気がする。

「ふう……。んじや、説明するわね」

真面目モードになつた。これを見られただけでもだいぶ価値がある気がする。

俺は姿勢を正し、次の言葉を待つた。

「私たちには、情熱思想理念頭脳氣品優雅さ勤勉さ、そして何よりも……不審者度が足りないッ！」

「お前はいつも俺を裏切ることだけはホントつまいな！」

久々にお前のことをちゃんと見たらこのザマだよ！

しかも本人は的を射た表現だ、みたいな感じで満足げなのでタチが悪い。

「これまではずつと探す側だったアタシたち……でも野兎を狩るなら野兎の気持ちを。不審者を狩るなら不審者にならねばならなかつてちょっと洋介！ なんでアンタ帰ろうとしてんのよ！」

勿論、この暑さとそれが生み出したバカに嫌気がさしてだよ！

来て早々、俺は帰ることにした。こんな暑さで、まともに不審者

探しなんかできるわけがない。

鉄扉に手をかける。かなり熱くなっていたが、長く持つていれば火傷してしまうだろう。そのくらいの熱を帯びていた。

「んじゃ、先に帰るか……ら……？」

ん？

一度耳たぶを指でつまんで熱を逃してから、一、二回ノブを捻つてみる。

「あれ？ なんで帰らないの？」

なんで帰らないの？ ジャなくてお前はむしろ引き止める側だろうが！

それはともかく、ドアは引いても押してもうんともすんとも言わない。少しずれるわけでもなく、退出を拒んでいるようだった。。

「あ、開かない……！ なんで開かないんだ？」

鍵がかかってるわけでもないのに、ノブが回らないわけでもないのに、なんだつて開かないんだ？ 背筋に大量の汗がつたうのがわかる。しかし……しかしこれは……。

「ん。まいったわね」

姫乃は人差し指を口元に持つていくと、目を瞑つて考え始める。コイツ特有の考え方のようだ。久しぶりに姫乃がこんな顔を見るのを見て、俺も鼓動が早鐘のようになつていた。

俺は頭を何回か搔くと、とりあえず一度席に着く。

「嫌がらせか？」

「アタシたちにするの？ 誰も得しないじゃない

「嫌がらせってのは非生産的なもんだ」

俺がそんなことを言つと、

「気を晴らす、といつておいては私のことを疎ましく思う輩がいてもしょうがないわね。大体は潰したと思うのだけれど」

ワザとらしく親指で首を斬るようなジェスチャー。お前マジで怖いな！

その場しのぎに部屋を見る。部屋の上部に小窓がある程度で、脱

出は不可能。温度もこれから徐々に上がっていくだろう。……まさ
に蒸し焼きだ。

俺は頭に手を添え、田の玉が潰れちまうくらいに強く田を閉じた。

くつそ……頭ん中がもやもやするぞ……。

吊るされたバナナを取る為には使う道具が足りないと同じだ…

今は言わば、お預けを食らっているだけだ。外と連絡を取るには
一体何があるだろうか……っ、そうだケータイか！

携帯電話。なんでこんな簡単なことを、すぐに思いつかなかつた
んだ！

思考の海から身をあげると、姫乃は必死に俺を呼んでいるようだ
った。

「ちょ……ちょっと、洋介ってば！」

「なんだよ。こいつちはもう」

良作が思いついでんだ。そう続ける前に、彼女は叫んでいた。

「アンタ頭から凄い血が出てんのよ！」

えつ？

恐る恐る、先程まで搔いていた側頭部を撫でる。
鼻についたのは、酷く粘ついて、鉄くさい汗だった。

*

俺は昔、大きな怪我をしたんだと聞いた。

親？ そう呼ばれるものに。

居眠り運転とか、信号は青だったとか、そんなことを聞かされ
ていたが、よくわからないのだった。

幸い、頭をほんの少し縫つただけで済み、すぐに学校へと復帰す
ることができたのだが……。

「またか……」

血塗れた手を見る。汗を含んだ血液は指の付け根から流れ落ち、
ピチャピチャと床で踊る。

「だ、大丈夫なの？ また傷口開いたりした？」

姫乃はあわあわとしながら、ハンカチとティッシュを差し出す。俺はちょっと迷つてから、ハンカチを取ることにした。

掬うように下から出血部をなぞり、ゆっくり押し当ててから、チラチラと見る姫乃の視線に気付き、俺は後悔する。

「なあ。もしかしてこれ、お気に入りのやつか？」

「え？ いや、気にしないで使いなさいよ！ ハンカチなんて、まだあるし……」

やつぱお気に入りなんだな……スマン。

でもこちらを選んだのには理由がある。ティッシュだと場所が頭なだけに若干衛生面が不安だ。ハンカチを当てておけば、止血程度なら短時間できるだろうしな。

それと、コイツにハンカチを買いなおしてやりたいんだ。

普段姫乃にはお世話になってるし、何かしらの形でプレゼントをしたかつた。身勝手といえば身勝手だろうが。

……ハンカチ、か。

*

事態は急速に終わりを迎えた。

あれから姫乃がケータイを持っていたことを思い出し、校長に電話したのだ。思いついていたとはいえ、言いそびれてしまつたので、ただされるがままに連れて行かれたのだった。

校長曰く、「野球部が置いていたバットが、偶然かんぬきのようになつてしまつた」という。たしかにここはある程度広いし、こんなところで文化系サークルが喋つている、なんて思わないだろうしな。

姫乃は俺の背中に掴まりながら隠れ、話を聞いていた。どうしていいかわからない校長は、とりあえず俺に話すしかなかつたようだつた。

先生に頭を下げて、俺たちは校門を出る。まだ日は高く、うだる

ような陽気だった。おもわず天を仰ぐ。

「お前さ。なんで俺の背中に貼りついてたわけ?」

ようやく離れた姫乃を尻目に、俺はゆっくり歩き始めた。姫乃是小走りでついてくる。小動物みたいな奴だ。

姫乃是少しふクン! とし、鞄で胸元を隠す。

「あ、汗かいてたし……恥ずかしくて……」

「さっきまで下着見せても平氣だつた奴が何言つてんだよ……」

ホントに変な奴だな、コイツは。

まあ、その。俺もあんまりコイツの肌とかそういうのを、あんまり公に晒したくなかったりする。独占欲つていうのは違うと思つんだが、姫乃是俺の……。

……姫乃是俺の、なんだつたんだ?

「それは……洋介だし、いいかなあつて思つて……」

「なるほど。俺だつていよい年した男だつてのに」

「洋介に襲われた程度で散る命なら、くれてやるわ

「無駄にかつこいいがもつと体は大切にしろ!」

とても楽しそうに姫乃是笑う。まるで空に咲く太陽のよう

。「ずつとこうやって笑つてりやあいいのによ、お前は。

「これから家に帰つて着替えたら、図書館集合ね。ご飯食べて、宿題を終わらせましょう」

「お前みたいに頭よくない俺には、ちゃんと教えてくれよ?」

「さあ、どうかしら」

酷く暑い日の正午。俺と姫乃是そんな約束をして別れた。鼻腔には、いつまでも鉄のニオイが香っていた。

七月三十一日

俺は市内の病院に緊急入院することとなつた。
原因は、過度な失血だった。

「目が覚めたか。……では、早速始めよつ
酷く懐かしい夢を見ていた気がする。だが、すぐに忘れてしまつ
た。

病室で横になりながら、先生の話に耳を傾ける。西口の射す病室
は、空調が整備されているせいか、まどろみのような心地よさにあ
つた。

「君は少し前の、車に轢かれたときのことを覚えているかい？」
静かに首を振ると、先生は続けた。

「頭の怪我、といつものは、必ずしも外傷イコール重傷とは限らな
いことが多くてね。君の、久瀬洋介という人間は、正にそれに當て
はある。

君は記憶をつかさどる器官にほんの少しダメージを負つた。しか
しだ。ほんの少しで君は姫乃を一度も忘れている」

「…………？」

先生の言つていることはとても難しくて、よくわからない。
とまどつていると、彼女は　先生は女性であつたようだ。今更
ではあるが、遠目からは凜とした格好よさしか見て取れなかつたか
らだ　俺の目を覗きながら告げた。

「一度目は恋人。二度目は仲間。彼女たちは色々な形で君を求めて
いるといつのに、君は事件のあつた日をずっと繰り返していた。毎
日焼きじてと称して鉄の棒を押し付けられるかのように、無意識の
内に体が被害に遭つたと勘違いし、頭から出血してしまつ。外傷は
ないのに、内側からダメージを受けていく……それが今の君なんだ。
……正直、治るかはわからない。意識の問題だ。君が久瀬洋介で
ある以上、事故を受けた事実は変わらない。だからこそ、君はしつ
かりとした意思を持たなければならぬんだ。事故は既に終わつた
ことだと割り切れ。深く考えてはいけない。怪我は軽いものだつた。
そう自分に嘘を吐け。自信を持つな。相手に委ねろ。……さもない

と、お前はこれからずっと、擬似的に事故に遭い続けることになるのだから」「

先生はとても辛そうに頭を伏せた。

「彼女たちも、心を殺し続けてしまうのだよ」
もしかすると、先生は彼女が心配なのかもしれない。俺はなんとなくそういう思つた。

軽く頭を撫でる。サラサラとしていて、特に傷ついているわけでもない。「オイも血の感じなんてしないし、まるで夢のようだつた。」「あの……」「

だから俺は聞いてみる」とした。

全てを掌握しているよつな、そんな氣にさせられる」の医者。

「俺は……夢を、見ていたんですか？」

「そうだ。夢だ。

夢、ということにすればいい。

だつてこういつ場合、全ては夢だつたのです、で俺が納得すれば解決するんじやないのか？ 思い込みを正せばいい。

全部、今までの出来事をなかつたことにすればいいんじゃないのか？

すると先生は深く息を吐き出し、俺に背を向けた。

「彼女に会えば、思い出すや。夢か現かなんて、くだらない観念なんて必要ないってことさ。全部思い出せるさ」

そう言い残して去つて行く姿を眺めながら、俺は記憶を想いかえした。

今もまだ、あの子を思に出せない……。

「こんにしあは。いや、こんばんはかな？ 久瀬洋介」
無想していると、一台の車椅子に乗った少女がやってきた。
西洋ツツジを抱えて。

その少女は車椅子に乗っていた。白のワンピースを着ていて、髪は長く、車輪に絡まないよう、結つて胸元から膝の辺りまで持っていた。結う為のリボンは赤く、大きな蝶ネクタイのよう毛先で揺れていた。

顔立ちは整つていて、スレンダーな体つきをしている。大きな瞳や赤くなつた頬からは、どことなくあどけなさを感じる。けれど、とても大人びた女の子だった。

「調子はどうだい？」……まあ、君の場合は精神的な疾患なのだから、完治というのは難しいのだろうね」「…………」

「……この時期に西洋ツツジ、いや アザレアですか。季節外れにもほどがありますよ」

西洋ツツジは一月から四月にかけての花で、鉢に植えて室内で育てる。季節柄、例え栽培できたとしても、長く持つはずがなかつた。「それだけ言えれば上等。ちなみにこれは、階下の花屋に無理を言って取り寄せてもらつたんだが、お気に召さなかつたかな？」

彼女の笑う顔は正にツツジのように晴れやかで。でも車椅子は彼女の華々しさを酷く損なつている気がしたんだ。

「私はと言えば足が弱くて車椅子なんだが、精神の方は強靭でね。君の文句一つ一つではそよ風にさえ劣るようと思えるよ。

……おっと、話がずれたね。まずは自己紹介をしようか。……そうだな。では、私のことは姫乃、とでも呼んでくれたまえ。少年」「姫乃……？」

「どこかで……どこかで聞いたことがあるような……」。

でも印象的に、こんなミステリアスな子ではなかつた気がするんだけど。

「思い出せそうかい？」

頭を振ると、顎に手を添えながら、

「だらうな。まあいい。……では、これを差し上げよう。姫乃？　は胸元から紙一枚取り出して、俺に渡した。

「これは？」

「うむ。君の交通事故についての調査書だ」

彼女から受け取ったものに目を通す。それは黒々とした字でギッシリと書き込まれていて、読むのにとっても時間がかかりそうだった。

「事故のこと覚えてることはある？」

「……俺が、被害にあつたことだけしか」

そう、君はこんなにも酷い精神疾患を負っている。彼女は言い、続けた。

「君は勘違いをしているはずだ。大方、車に轢かれた、くらいの認識なんだろう……まるで違う。被害者の数を見たまえ」

恐る恐る、様々な概要を飛ばしながら、被害者の数を見る。見てはならない。そう言つもつ一人の自分を押さえつけて。

「さ……三百、五十人？」

概要まで戻りながら、俺はあまりの数に呆然とした。

彼女は、語る。

「電車の脱線事故だつたんだ、君が巻き込まれたのは、君と姫乃是両親を伴つて電車に乗つていた。確かに、一緒に遊びに行くんだつたかな。ところが運転手が居眠りをしていて、誤つてスピード过多でカーブに突つ込んでしまつた。君と姫乃是家族を犠牲に、生き延びた」

「犠牲に？」

「犠牲になつた？ 親父とお袋が？」

「じゃあ俺の親は、今も家で待つてくれている親はなんだってんだ？」

「……君と姫乃の親は死んだ。即死だ。君たちだけ病院で手当を受けた。生還者は二人……言わずもがな、君たちだ。しかし二人の中に、とんでもない傷が膿み、爛れ、腫れてしまつていただ。……そう。例えば今の君のように現実を歪めてしまうような力が身に付く、とかね」

彼女は溜息を吐き、そつと窓際に寄つて窓を開く。都会の喧騒とは思えないほど静かな場所だ。何も

「聞こえない　だろう？　ここには東京の中心。車や排氣ガスにまみれたここで、そんな状況、ありえるかい？」

君が変えたのさ。言外に彼女はそう告げていた。

「君が見たいなら僕をここで何をしようと咎める人はいないだろ。君が望めば、なんだつて叶う……そういう体になってしまったんだよ」

俺は憂いに満ちる彼女から、なんとなく顔を背ける。背けた先にツツジがあり、まるで彼女からは逃げられないと強く感じた。

俺が、世界を変えただって？　そんなトンデモ小説みたいなことがあつてたまるか！

「ありえるんだよ。君は彼女を生み出したんだからさ。　おいで、姫乃」

何度か軽いノック音がドアを伝づ。そしておずおずとドアが開いていく。

田の前には夢の中の少女、青洲寺姫乃がはにかんでいた。

*

「この空間は君の世界……君の視点によつて左右される空間だ」

車椅子の姫乃は語りだす。夢の中の姫乃（通称、夢乃）は、まだ一言も喋らなかつた。

「君の視点で世界が変化する。いや『無意識のうちに変化までの過程を終わらせる』が、正しいのか。例えば、君が僕たちにHローリーとをしたくなるとする」

「は、はあ？」

「わかりにくいか？　なら、君が私の平坦な胸を揉みたいとしよう。勿論、そちらで顔を赤らめて妄想しているムツシリな女児のバカデカい胸でもいい。……君は無意識のうちに僕らを口説き、必ず目標を達成してしまうのだよ」

よくわからない、といつか例えが最悪だが、つまりは「うこうこう

とだ。俺は改めて整理することにした。

野球選手になりたいと思ったら、そこまでの練習などの過程をすつ飛ばして、いつの間にかメジャーリーガーになっている。付け加えて言うなら、その時点で前線でやつていけるほどの実力がある、ということだ。元からの才能と勘違いしてしまいそうだが、実際は無意識のうちに練習しているに過ぎない。

「君の意識が眠り、常に九割の力で無意識に努力する……そういう力だ。時間経過すら関係なく努力するのでね、肉体は酷使するもの、限界はわきまえているから、たった数日で物事をこなせるようになる。

例えば他にも、君は外の音を分けて聴いている。私の声に集中しているから、他の音が聴こえない。

ほら、彼女泣きそうだぞ」

言われて夢乃を見ると、俺の布団の裾を握つて拗ねていた。

「もつ！ 言い訳してるつていうのに、全く全然これっぽっちも聞いてくれないからイジメなのかと思つた！」

夢乃はそっぽを向いてしまつたが、話題が胸の話題だつただけに、俺としては追求しづらかった。

「相変わらず仲がいいな、君たちは。さて、本題に入ろう」
姫乃是軽く咳き込んでから、ゆっくり語り始めた。

「久瀬洋介くん。今から『姫乃』に答えてくれ。君はどちらの姫乃に恋していたんだい？」

*

「……なんの冗談だ？」

姫乃の言つてること、やりたいことに理解が追いつかない。
どちらが好きか？ そんなこと急に言われたって……。

「これは精神疾患を治すうえで重要なものだ。これさえどうにかな

れば、全てうまくいく。僕はそう思つ。

……元々、僕たちは双子だった。だが事故の最中でどちらかが死んでいるのだよ。つまりどちらかが、いつまでも君の心という水を濁す水鳥なんだ。水を濁す鳥は、殺さなければならぬ」

夕暮れは一向に終わらない。いつまでも、いつまでも。西日は縫いとめられたように俺たちを照らし続ける。

「いや、簡潔に言おう。君がいつまでもうだうだ未練なんか引きずつてゐるから一人同時に存在しているんだ。

多分君は僕たちのどちらかが死んだと聞いてしまった。だから悲しくて、やるせなくて蘇えらせた。無意識の努力以外に もっとも、これは誰にでもできることなのだが もっと君は世界を変える力を使つた。何かわかるかい？」

俺は静かに、目を閉じた。

「……逃避と事実の歪曲、だよ

*

『世界』の話をしようと思つ。

『世界』とは、今俺たちが見ているもののことだ。

目の前にあるものが、俺の観測している『世界』だ。これは『見えている』だけであつて、一つ一つの事象が正しいかは一概に答えられない。

例えばの話だが、目の前に置かれた茶色の飲み物がお茶なのか、それとも未知の液体なのかは、飲んでみないとわからないとしよう。誰かが、俺が未知の液体を飲み、顔をしかめている所を見ていれば、『未知の液体を飲んでしまつた世界』になる。

しかしその状態で、もしも一人だつたのなら。

例え飲んだ物が未知の液体であつたとしても、他者にはお茶だと嘘を吐く事ができる。

『お茶を飲んだ世界』と『未知の液体を飲んだ世界』が同時に存

在できる。

これが世界改变の要素だ。

俺の場合は、自分自身の記憶を曖昧にすることによって『彼女が死んだ世界』と『元々いなかつた世界』を無理やり作りあげたのだ。勿論、これには無理が生じてくる。必ず正しい情報、真相などが耳に飛び込んでくるからだ。

だから、俺は無意識で物事をこなす力を意識的に作り上げたのだ。

*

……彼女が死んで悔しかつたから。姫乃とアイツと三人で遊ぶ時間で、何よりも楽しみに、大切にしていたから。だから信じたくないつたし、みんな嘘を言つているんだと思った。

当時の俺はアイツが大好きだった。頭がよかつたし、何より俺のことをいつも引っ張つていってくれた。姫乃も俺の後から、呆れながらもついてきていたつけ。

そんな彼女が死んだんだ。逃避だつてしたくなるさ。好きだった子が目の前で死んで、だけど瓜二つの妹は生きていて……。

「なんとなく、わかつてたんだと思うよ。自分でも」

二人を見てから、吐き出すように告げる。罪をさらけ出すように。

「俺は姫乃を慰み物にして、アイツの死を誤魔化してたんだ……」

姫乃是本当によく似ていた。俺は度々アイツと勘違いして呼び間違えたが、姫乃は笑つて許してくれていた。時にはアイツの真似をして、元気付けようとしてくれた。

そこに甘えてしまった。姫乃のことなんか考えていなかつた。アイツに対する気持ちを、姫乃にぶつけていた。こんなもん、ただの好意の押しつけだ。

「本当にごめん……でも」

でも、事故から立ち直れなかつた俺を姫乃は引っ張つてくれた。ある時は、事故現場の近くにいた不審者を探そぐと。

そいつが犯人だから、会つて一発殴つてやろうと。

ある時は、部活を作つて俺を色々な所へ連れて行ってくれた。

そのおかげで気負わずに、以前のように生活できるくらいに元気になることができた。

姫乃是俺を引っ張つてくれた。アイツの代わりであるうと。俺のために努力してくれていた。

姫乃だつて、悲しいはずだつたのに。

「だから俺は、姫乃が好きになつたんだ」

「だつたら」

夢乃　いや、姫乃是俺の手を握つたまま、俺に問いかける。
「だつたら、教えてください。洋介、あなたはどちらが本物の姫乃だと思いますか？」

悲痛な、けれど強く願うようにこちらを見、俺の腕を胸に抱く姫乃。

車椅子に乗つた姫乃是目を閉じる。落ち着いているように見えるが、ギュッと握つた拳は真っ白だつた。

二人の姫乃が、こんなにも願い、恐れている。死んでしまつたお前はどうちかなんてわからないが、ただ一つ、お前に怯えて苦しむ女の子がいることはわかつた。

……そんなの、なんか悲しいよな。初恋相手が死神みたいな扱いされてるしよ。

少し深呼吸。俺の答えは、決まつた。

覚悟を決めると、俺は姫乃に想いを告げたのだった。

九月十三日

先生の言つとおり、俺は答えを相手に委ねた。

その結果、俺の謎の病気は、ひとまず治つたようだ。

治つたようだ、というのは、無意識下のことであるからだ。俺自身が治つたかはわからないが、現実を歪める力はなくなつてしまつ

たし、きつともう一きなり出血、なんてことはないだらう。

そう内心ほつとしつつも、懸案事項は山ほどあるのだ。

まず一つ。夏休みが終わってしまった。

俺の予定では夏休み後半に、海の家でたまたま出会った女性とひと夏のアバンチユールを過ごす予定だったのだが……このままだと休み明けテストも真っ赤に散り、全教科補修という無制限デスマーチとしやれこみそなのである。

そして二つ目。今俺は海に来ている。

今日？ 今日は平日だ。学校？ 休み明けテストの真っ最中。デスマーチ特等席の切符（多分、教卓の前の席）を片手に、隣街の海水浴場に来て、ただ呆然としていた。

海は季節柄、遊泳禁止になっていたりする。温暖化でまだまだ熱いつてのに、九月の一日には浜に遊泳禁止の看板が立っていたようだ。

そんなところになんで来たのか、って言われると、正直俺もよくわからないんだが……。その、なんといつか……。

姫乃が来たいって、言ったんだ。

俺と姫乃は付き合い始めた。告白して、あいつらは納得した。それだけだ。

そんなこんなで始まったカップル的生活だが、結局俺が入院してる間はデートなんか行けなかつたし、それで姫乃に提案したら、こんな結果に……。

「ま、まあ？ 男は甲斐性だし？ デスマーチの一つや二つ、かかつてこい！」

出来ればやらいで欲しいんだけどね！

そんな一人コントを続けていると「おまたせ」という声と共に姫乃は更衣を終えてやつてきた。

「どうかな、洋介？」

「むつ……」「あつ……」

思わず声が被ってしまい、彼女たちは顔を見合させていた。

……これが、俺の出した答え。

俺は一人の姫乃と、共に生きることを選んだ。

片方はもう死んでいる。それは理解していた。しかし、名前がわからない、思い出せない以上は、姫乃として存在することができる。つまり彼女の本当の死とは、俺が存在を自覚しない限り訪れないのだ。

俺は、姫乃の悲しむ顔なんか見たくなかった。どちらかが絶望して消えるくらいなら、俺が奇異の眼差しを受けようがなんだろうが構わない。

他人から見たら、きっと今の姫乃は一人にしか見えないだろう。この光景が、とても怪しく映るに違いない。

それに一般的な視点から見ても、諦めきれないからといって、女性一人と付き合いたいなんて言い出す男は最低だろう。

それでも俺は姫乃が好きだった。

どちらかが生きていない、なんて関係ない。ずっと三人でいたいと思ったんだ。

だから一人に委ねた。

二人は一つ返事で、俺のワガママに賛同してくれた。

「洋介。僕の水着姿の方が素敵だつて言つてくれて構わないんだよ？」

そう胸に手を当てて自信満々に言い放つのは、車椅子に乗つていた姫乃だ。右腕に杖を突くための器具を取り付けて、なんとか歩行している。

その自信溢れる水着といえば、白地の布に、淡く青色を織り交ぜたパレオ。正にコイツの為の水着と言つてもいいのかもしれない。

「洋介！ アタシ！ アタシはどうかな？」

こつちは元気な姫乃だ。俺の腕を引っ張りながら感想を求めてくる。

前は布が多めかと思えば、背中はパックリと腰の辺りまで開いている。恥ずかしがりやのクセに奮闘するコイツらしい水着だ。

「うん。姫乃、すげー似合つてる」

「えへへ……」「ふふ、こそばゆいな」

双子なのに一人とも全く違う喜び方をする。不思議なもんだ。

「あ、そうだ。ねえねえ洋介」

「ん？ なんだ？」

「よかつたら、アタシたちに名前をつけて欲しいんだけど……」

なんで、と思つたがそれもそつか。

いつまでも一人を姫乃と呼び続けるわけにはいかない。

病院で先生は嘘を吐け、と言つた。もし仮に断定してしまつたら、俺の『彼女は既に死んでいる』という意識がどちらかの体を引き裂き、その姫乃は夢幻に消えてしまうからだ。

ようするに転生……名前をつけなおす必要がある。今までの個としての特徴を残しつつ『青洲寺姫乃』の制約から脱却する。姫乃に縛られず生きるために。

別段悩む必要はなかつた。俺は思うがままに一人に名前をつけることにした。

「んじやお前は元氣で向日葵みたいだからヒナタ。クールなお前は西洋ツツジみたいに華やかだからツツジだ」

姫乃という名前に縛られていた彼女たち。

姫乃という名前に罪を償つていた俺。

ここを新たな出発点とするのも、それはそれでいいのかもしけないと思つた。

「ぼ、僕が西洋ツツジ アザレアか……。洋介、お前、アザレアの花言葉を知つていて付けたんだろうな？」

「いや？ お前が持つてきてくれてたから付けただけだ」

「あ、扱いが雑な気がするぞ！ まあ、い、いいのだがね……」

鼻の頭をかきながら、ツツジはこっちを見ずに言い捨てた。

これは後日に知つたのだが、西洋ツツジ、別名アザレアの花言葉というものは『恋することを知つた喜び』というものらしい。それを知つて俺は赤面しながら布団の上で悶え苦しむことになるのだが、

それはまた別の機会に……。

「洋介！ 早く海行こう、海！」 「バカ、遊泳禁止だから入るんじ
やない」

ツツジ。ヒナタ。

今は名前も忘れてしまった彼女と姫乃の、新しい名前。

季節を謳歌する向日葵と、季節外れでも咲き誇るアザレア。

俺だけが、育てる事のできる花。

決して誰にも芽引くことができない、大切な花。

俺に育む事ができるだろうか。一度だけでなく、一度も彼女たち
を傷つけた俺に……。

少なくとも今は、この手を引く一人が幸せならそれでいい。笑顔
を見て、そう思えたんだ。

俺たちはゆっくり水際へと歩き始める。

最初のデートは俺たちらしく、季節外れの海浜デートだった。

ヒナタは駆け出し、ツツジはそれを^{たしな}窘めながらそれを追う。俺は
といつと、後ろ手に隠した プレゼントである一枚のハンカチをい
つ出したものか迷っているのだった。

花は今日もまた、咲き誇っている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0874u/>

花を愛でるということ

2011年6月15日21時55分発行